

ふみの会 ニュース

■発行 ふみの会広報部
 ■発行日 2005年2月19日
 ■連絡先 藤川博樹
 〒115-0045
 北区赤羽1-48-3 ドミール藤203
 tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
 ■編集 塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

No.280

3月行事日程

■ ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
ワード文書も可

kamo@sun.email.ne.jp

■ 3月19日(土) 4:30

四ツ谷地域センター 11F
地下鉄丸の内線 新宿御苑下車
四ツ谷方面へ徒歩5分



朝鮮民主主義人民共和國と中国の切手

◆かにかくに現場は強い、といった小説家があった。日本中を飛び回っている若い写真家、二宅岳さんと立ち話をする。かれが近所に仕事場を作ったので、しよっちゅう顔をあわせるようになったのだ。秋田県境の群馬県にある金山町というところに通っているという。人口は7〜8000人くらい。町の有力者が80年代に渡欧して景観のたいせつさに気付き、地場産業の林業と併せて「金山スタイル」の住宅をブランド制定、補助金をだして建設を奨めた。大工や建築家の養成も目的意識的に取り組まれている。しかも建築費をだしてコンペを続けているという。100年先の町のデザインが描かれているらしい。合併話は持ち上がったって問題にされない。当然だろう。リーダーに長いスパンの定見があり、住民にそれが浸透すれば地域は守られる。「同じ山間地だけど、藤野とちがつて水田があつて、ある程度米が作れるからね」岳ちゃんの話はいつも具体的に現場に密着している。自治体の合併が強引に進められているけれど、そこには長期的なビジョンを持ち得ない人間が長として居座っている場合がほとんどだ。現場にいつてものみてきている人の話は、問題の核心をはっきりと示す力を持っている。◆津久井4町と相模原市の住民グループが共同して、もっかの強引な合併の進行に抗議、反対する集会を開く。昨夕も津久井選出の自民党榎本県議の事務所へ集合を持った。来ているメンバーをみると共産党のひとたちがたくさんいる。文字どおりの異域同舟である。榎本県議は藤野では「私利私欲で動いている」と合併推進派に攻撃されているが、自分の選挙区が消滅するわけだから抵抗するのは当然だろう。しかもこれまでちゃんと選挙というハードルをくぐっている。どちらかに民主主義的な理があるか論を待たない。この1点でも判るように、合併推進派は同じ保守といっても頑迷さは桁違いだ。自民党の組織的な締め付けももちろんあるだろうが、合併にともなう特別償目などの企業グループの存在が背後にあるのかもしれない。利権があるからこそそれらも必死になる。町民説明会で反対派に罵声をあびせたり、中間派の町議たちを集団で取り囲んで吊るし上げたりしているのは、そう考えると説明がつく。平成の大悪行に、そんな生臭い背景があることを報じたマスコミはまだない。(K)

留学生

蒲原直樹

混沌市はメガロポリス郊外の平凡な街だ。でも、駅前にはそこそこのビルが

立っているし、大学もある。もっと田舎の方から人々は娯楽を求めてこの街に集まってくる。同じくそこそこ賑わう商店街には都市生活を満たす銀行や映画館、ゲームセンターなどの店舗がほぼそ

ろっている。しかし駅前を三百メートル離れば、もうそこには住宅だけが並んでいて、ごくたまにコンビニを見かけるくらいだ。言ってみれば日本中どこにでも

もあるプチ東京というやつなのだろう。鳥山正平は駅前通りから一本入った細い路地にあるアパートに住んでいる。木造モルタルの古い建物ではあるが、管理人がいいのか外壁は塗り替えてあるし階段のペンキも新しく、よく手入れされていて住み心地はよかった。部屋は広

めの3Kで、日当たりもいいで共稼ぎの妻と幼稚園児の娘の三人暮らしには充分だった。

「君、ちよつと頼みたいことがあるんだけど」

営業部長からそう言われて、正平はあわてて立ち上がった。

「それはもう、部長の頼みとあればどんなことでも」

「そう言ってくれるとうれしいね」部長は相好を崩した。

「実は、留学生を一人預かつてほしいんだ。いや、ほんの数日でもいい、たまたま宿が取れなくてね」

「留学生……ですか？」正平は椅子に座り込んだ。

「あのお……うちはマンションでも団地でもなくて、ただの民間アパートなんですよ、留学生を泊めるのはちよつと……」

部長のお家だったら、大きいし部屋数もあるでしょう、お宅に泊めたらいいかですか？」

「うちにはもう二人来ることになってるんだ」部長は肩をすくめた。

「なあ、たのむよ、向こうの取引先のお客さんたちで断れないんだ、頼りになるのは君くらいだし……それに」

部長はそこでニヤリとした。「留学生は若い美女だよ」

二週間後に留学生がやって来た。妻に

なんと説明したらいいのか考えあぐねていた正平だったが、意外にこはうまく運んだ。インドネシアからの留学生二

ナが、明るく気立てもよく頭のいい女性だったので、妻も娘もたちまちファンになったからだ。彼女は丸顔の瞳の大きい娘で、長い黒髪を一本に編んで後ろにた

らしていた。少し色は黒かったがTシャツにジーンズ姿でいると日本にもたま

にいたタイプに見えた。正平は物置になつていた四畳半を空け、マットを敷いて

ベッド代りにし、彼女の部屋にした。

コミュニケーションは二ナの片言の日本語と、妻の片言の英語で行われ、案

外うまくいった。彼女はイスラム教徒なので豚肉だけは駄目だったがそのほか

のものは好き嫌いなく食べ、インドネシア料理を作つて鳥山一家に食べさせた。

「ベジタブルもフィッシュもパブリカもフェイクだから、フェイク・スープです」

彼女は謙遜したが、その味はたいした

ものだった。

二ナは農業大学の留学生だった。農薬・肥料などが専門のようで、薬品のサンプルや専門書を山のように抱えて日

中は大学へ出かけた。夜は毎日のように交歓会が開かれていて、けっこう帰りは遅かった。二、三日だった二ナの宿泊予

定はずれて行き、正平はそれを厄介と思わず、むしろ喜んだ。日曜日には鳥山家

と二ナの四人で新宿・渋谷に出かけ、東京見物を楽しんだ。

正平の家に来て一週間目の夜、十二時を過ぎても二ナは帰つて来なかった。

その夜の最終ニュースを見て、正平は腰を抜かさなげに驚いた。赤坂のア

メリカ大使館に自爆テロ攻撃が行われ、大使館は半壊、多数の死傷者が出たとい

うのだ。そしてその容疑者はインドネシアからの女子留学生らしい、という報道

だった。しかも犯行には農業大学のトラ

ックが使われ、積まれていたのは農薬を

爆薬に転用したものだという。

正平は夜中にもかかわらず、あわてて

営業部長の自宅に電話した。

「どういふことなんでしょうか、部長も知っていたんでしょ？……部長もテロ組織のメンバーなんですか？」

「馬鹿いな！」

営業部長も正平同様にくろたえている様子だった。

「そりゃ、昔は俺だって学生運動くらいやったさ、でも、今の日本で真面目にテロを目論むやつがどこにいる？」

「それはそうですが」

「たしかに、市民的な自由が制限され始めているとか、自衛隊が日常的に海外派遣されて、憲法改正が日程にのぼっているのに国民の中に大きな抵抗運動が起らないとか、動機がないわけじゃないよ。でもテロではなにも解決しないくらいのはみんな知っているだろう？……それよりなにより、テロで殺さなければならぬほどの大物政治家も財界人もいないじゃないか。今の日本じやどいつもこいつもチンケな俗物ばかりだ。天皇一家だって、昔とちがってお人よしの凡人ぞろいだらう？あんな連中、ほっとくしかないじゃないか。要するに命がけの殺し合いなんて流行らないんだよ、今の日本の問題はもっとソフトでもっと根本的な、もっと抽象的なものな

んだよ」

団塊の世代のさきがけである部長の叫びは、多少の違和感はあるが正平にも共感できる内容だった。

「わかりました、信じます。でも、警察が来たら正直にみんな話しますよ、いいですね？」

正平はそう言つて受話器を置いた。

その夜遅く、2時近くなつて二ナが帰ってきた。

「無事だったのね！」

心配で眠れずにいた妻が彼女に抱きついた。

「ワツツ、ハブン？」正平は涙目の二ナに尋ねた。

彼女が話した言葉は半分くらいしかわからなかったが、だいたいこんな筋だった。

営業部長の家に下宿した二人の留学生、ルシルとジャクリヌが今回のテロの実行犯だった。彼女たちはイスラム原理主義組織アブ・サヤフのインドネシア支部に所属していて、爆発物製造の訓練を受けていた。そして先に日本に潜入していたメンバーの用意した材料を使って起爆装置を製造し、農業大学の倉庫からトラックと大量の農業を盗み出して

犯行に及んだらしい。育ちのよい二ナは隠れ蓑にされたのだという。

二ナは事件の直後に警察に拘束され、長時間の尋問を受けた。二ナは自分が実行犯の女性たちとは出身地も出身階層も違うこと、自分が平和主義者であることを必死に説明し、インドネシア大使館からの要請もあつて二心保釈されたらしい。しかし同時に三日以内の国外退去命令を受けたという。

「若い娘が、なんでまた命を捨てなきゃならないのかねえ……」

死んでいった娘たちも二ナと同じかわいい女の子たちだったのだろう、恋も知らずに散っていくなんて、なんでもつたないことだろうか、そう思うと正平の胸はきりきりと痛んだ。

「若い女だから選ばれたんでしょう。男だったら日本に入る前にかまっちゃうもん」

妻は正平の切ない胸のうちを知らずにドライに応えた。

「二ナちゃん、帰っちゃうんだね」娘は眠そうな目をこすりながら涙ぐんだ。

翌日、鳥山家にも刑事がやってきて正平に事情聴取した。午後には二ナがイン

ドネシア航空便で帰国した。会社があるので正平は行けず、成田には妻が付き添った。

正平が午後から出社すると会社の中はこの話でもちぎりだった。営業部長は早朝に拘束され、二晩も取り調べを受けたという。三日目に出てきた部長と「災難だったね」と言い合い、鳥山家にとつての事件は終わった。

ところが海の向こうでは事件の続きが起きていた。ジャカルタに向かう途中のインドネシア航空機を、米軍戦闘機が取り囲んでグアムに誘導、グアム空軍基地で乗客の数人が逮捕されたのだ。そしてアメリカ憲兵隊から取調べを受けた二ナが、

「自分が主犯である」と自供したというのだ。

人間というものはわからない。現在、アメリカとインドネシアの間で激しいやり取りが続いている。正平はどつちの言い分が正しいのか判断がつかない。さつさと国外退去処分にした日本政府が一番利口だったという声さえある始末だ。

混沌市には今日もアジア各国からの留学生たちが闊歩している。

新シリーズ

おれたちの村 ③

蒲原ユミ子

「お前のおやじはいい腕の太工だった」

陽平の父ちゃんは陽平が入学する前に仕事中の事故で死んでしまった。今は地元の温泉旅館ではたらいっている母ちゃんと弟の3人家族である。陽平はいい腕だったはずのとうちゃんがつぜんいなくなった時のことは思い出したくない。ふいとそっぽを向いた。その陽平に、じいさまが言った。

「お前、うちのムサシと遊んでくれないか」
(ええっ！)

陽平はどんぐりまなこを見開いてじいさまを見た。じいさまは額のたてじわをよせ困ったように言った。

「ムサシはさびしがり屋のあまえん坊でな。わし1人が相手ではかわいそうなんじゃ」

陽平は少し事情がわかってきた。それと、クロはムサシという名であることも

ほっとしながら言った。

「いいよ。でも、おれはお前じゃあなくて陽平というんだぜ」

いかついじいさまの目がくしゃっとくずれた。

「すまん。陽平くん。たのむ」

陽平はにかつと笑いビーバーのようなじょうぶな前歯を見せた。

「オツケー、おれ、ムサシ大好きだもん」
じいさまもほんの少し口元をゆるめた。人生のしわがこく深くきざまれた男のかすかな笑顔だった。

陽平は雪道をいそいだ。

道路沿いに古い二階層が見えてきた。

陽平の父ちゃんは自分で新しい家建てると言っていたのに、建てる前に死んでしまった。もちろん、陽平は今の家に不満がないが、山村のじいさまに父ちゃんのことを言われて思い出しただけ

だ。

玄関の前に立ち、鍵を開けて中にはいる。居間で、弟の健人が1人でテレビを見ている。陽平を見て喜んだ。

「おにいちゃん、おかえりなさい」

陽平はランドセルを居間のすみにある机に投げるようにおきながら言った。

「めしにしようぜ、手つだいな」

「はい」

健人はテレビを消しすなおに立ち上がり、陽平のあとにくっついて台所に行った。

陽平は食器だから広い皿を2枚だし、保温になっている電気釜からご飯をもりつける。そして、ガスレンジの上のなべのふたを開けカレーを上のにせる。カレーはきのうの残りだけど、陽平も健人もカレーは大好きだからもんくはない。給食がない前の日の夕食はカレーかシチューと決まっている。母ちゃんは車

で30分くらい奥にある温泉旅館では

たらいでいていそがしいが、料理はうまい。というか、陽平は学校や学童でたっぷり遊んで帰るから腹がぺこぺこで、早い話がなんでもうまい。たくさん食べる

ところが、こんど1年生になる健人はテレビや本が好きである。ご飯も陽平の半分くらいしか食べない。陽平はカレーも健人の分は小もりにした。健人はせまいテーブルにスプーンや牛乳を用意した。

陽平は大急ぎで山盛りカレーをたいた。早く行きたいところがあるから。健人はのろのと半分も食べてない。

陽平は牛乳も飲み終わり、皿などを流しに運んでさっさと洗った。自分で食べた分は自分で洗うように母ちゃんにきびしくしつけられている。そして、また食べ終わっていない健人に言った。

「じゃあ、兄ちゃんはお出かけてくるからな。ケントはおとなしくするばんしてい

るんだぞ」

健人はぎよつとして立ち上がり、さげんだ。

「ほくもいっしょにいく！」

いつもの言葉に陽平はうんざりした。

「おまえ、まだめし残ってるし」

と言いかけたら、健人は残りをむちゅうで口にほおりこんだ。げんきんなヤツめと思いつながら陽平はいじわるく言った。

「それに、今からいくここには犬がいるんだぞ」

健人の手が止まった。健人は犬が大の苦手。くさりでつないであつても、近づかない。またどういうわけか、陽平にはしつぽをふっている犬も健人にはほえたてる。陽平はこわい顔して健人に近づけた。

「大きくてまつ黒い犬だぞ」

健人はカレーをのみこんでから聞いた。

「おにいちちゃん、だれのいえにいくの」
陽平は正直に教えることにした。

「山村のじいさまの家さ」

健人はいふかった。あそこには小さな子どもがいなくてくらいい誰でも知っている。なんでそんなところに行くの？という顔して健人に、陽平はえらそうに教えた。

「じいさまにたのまれたのさ。犬のムサシと遊んでくれって」

首をかしげている健人。

「そういうわけだな。ケントはおとなしく本でも読んでるよ」

陽平はゆうゆうとぼうしをかぶり玄関に出ようとした。健人がさげんだ。

「おにいちちゃん、ほくもつれつてっ！」

陽平は思い切りいやな顔してふり返った。

「でつかけておつかない犬だぞ」

「ほく、はなれている」

というなり、健人は残りのカレーを大急ぎでかつこんだ。健人は犬はこわいけど、山村のじいさまの「お屋敷」と聞いたらじつとしていられない。きれいな白壁の門。大きくてりっぱな鯉がうようよ泳いでいる堀。お城みたいな家の屋根がわら。そして、子どもならだれだって1度は遊んでみたい広い庭。それに、やつぱり健人だって1人でいるよりお兄ちゃんのをそばがいい。陽平はひとりで行くのをおきらめるしかなかった。た。(つづく)

宇宙のささやき その5

竹下君のこと

藤川博樹

竹下君の性格を簡略に述べると、不器用で誠実ということだろうか。高校一年のときに同じクラスになって話が合い、同じく同級の白根君と一緒に音楽や数学の話をするようになった。

2年に進学するときに、新しい物理と数学の教科書が手に入って、自力で全部読もうという約束をした。高校生らしい軽率な判断だが、意欲的でなかなか面白い決意であると思う。

やってみるとわかるがこれはすぐに挫折する。物理も数学も教科書を全部読むのは簡単だが、文字通り読むだけであつて、読んだだけでは何にもならないのはもちろんである。

竹下君はこの試みにまともに取り組んだ。数学で出てくる証明など、全部自力で証明し

ようと取り組んでいた。これは大変である。人類が二千年かかって作ってきた定理を最初から自分でおさらいしようというのである。

話は飛ぶが、先日、高校一年生になった息子が、数学の問題を教えてくれと問題集を持ってきた。三角関数の問題である。息子が引つかかっていたのはわずかなところで、最初の方は三角形の比率で計算するとすぐに解けたが、最後のところがえらい複雑なことになって、5分や10分で解けそうにない。ああでもないこうでもないと言っていると、息子が「パパ、正弦定理って知ってる？」と聞く。そういう定理があるのは知っているがなんだか忘れたと答えた。息子がこういう定理だと余白にさらさらと書き出した。すっかり忘れていたが、その定理を使うと問題はあっさり解ける。解けるといふものでさえなくて、定理に数字を当てはめるとそのまま答えが出る。「この定理は本当か」「式そのものはこうだよ」「こちらは忘れてるもので、半信半疑である。しかしこんがらがって苦しんでいる問題が、定理を適用するだけですぐに答えが出る。こちらは定理自身を疑っているものだから、卓球の早朝練習にそなえて息子が寝たあとも夜中まであだこうだとひねくって、どうやらこの定理は正しそうだというところまで行き着いた。

翌日、インターネットで正弦定理を確かめ

ると、まさにその通りで、証明を読むと難しいところもなく、トンプダウンでたどっていきとすぐに納得できる。なんと偉大な定理だと思っただが、その定理のことはすっかり忘れていて、しかもその後数十年の自分の人生の中で一度も使うことがなく済んでしまった事実には我ながら驚いてしまった。

そこで竹下君の話に戻るが、竹下君は数学と物理の2千年の歴史をたどり、定理の証明を自力でやろうと始めたのである。今ならこれは何年かかるかわからないと最初からあきらめるが、若さのもつ意欲と希望と野心がそうさせたのである。正弦定理の証明がわからなくても、機械的に正弦定理をあてはめるだけで、問題はあっさり解けるのに、竹下君は数学は暗記ではないのだから、自分で考えて解かなければならないと、正弦定理の使用を拒否するようなものである。人がなし遂げた証明を順番に読んで、その証明は正しそうだと思得るのは簡単だし、その受け売りも簡単である。しかし、最初に正弦定理に気づき証明した人は偉大である。それぐらい自力でやるのと、人真似するのでは差がある。だが、人類の2千年の科学はそうやって、先人のなし遂げた土台の上にならって発達してきたのである。数千年前のエジプト時代の人間と現代の人間の心情はそれほど変わっていないが、科学・学問に限っては積み重ねがきくからそ

の差は圧倒的である。デカルトやニュートンの肩の上に立っているから現代科学が遠くを見ることができるといふことだ。

竹下君はそういう性格の人間だった。バッハが好きで、音楽と数学の関連のことを考えるとわかる気がするが、人に自分の好みを押しつけるような人間ではない。私がある頃たまたま毎日聴いていた、チャイコフスキーの5番のことを話すと、学校の帰りに同じく旧友の佐野君などと一緒に私の家にまで来て聴いて行った。私の家はそのころ新宿にあり、高校から5分の距離で、電車通学の級友たちが帰りに簡単に寄っていくことができたのである。

この曲を竹下君がどう受け止めたのかは言葉ではわからなかった。だが、しばらくすると、あの曲を聴きたいと言って今度は一人で家に来て、2楽章だけを聴いて行った。

そして、その後「うんいい曲だ、思い出すたびに感心する」とたびたび話っていたところを見ると、よほど気に入って感銘を受けたことは間違いない。あの構成は素晴らしいとも語っていた。当時、私は2回聴いただけでそこまでわかるのかと、こいつは頭の構造が違うのかと脱帽していた。才能の違いだと思うが、私は当時も今も、曲を1度や2度聴いたぐらいでは何も思い出すことができない。気に入った曲を何十回何百回と聴いて、よう

やくずーんと「ああ、そうだったのか」と深い感動がやってくるというスタイルである。耳で聴いただけではもちろん演奏できないし、楽譜は線の数を教えないと読めない、つまり読み方を知っているという程度である。

竹下君がチャイコフスキーの5番の何に感心したのか、正確なところは推測の域を出ないが、モーツァルトが好きでモーツァルトになれなかった晩学のチャイコフスキーの曲は、だいたい構成ががちりできていて、旋律だけでなく曲の構成、旋律の対比自体が美しい。

そして、この時のレコードのカラヤンの演奏が細部まで磨き上げられた完璧に美しい演奏であった。十全に磨き上げられ、この世のものとも思われない宝石のような美しさであった。

カラヤン・ベルリンフィル チャイコフスキー交響曲第5番

その後、私は数学を自力で証明するという試みはやめてしまった。そして、大学入試に失敗して予備校に一年間通ってわかったことは、入学試験というのは独創的な数学の力量を問うというのではまったくなく、ましてや受験者が数学や学問に愛情を持って取り組むたいと考えているかどうかにも関係がないということである。一年後、数学の入試の試験用紙に向かったとき、そこにある問題は全部

一度は解いたことがある問題であった。自分で解いたのではなく、予備校で先生が黒板で解いたのみでいただけであつたのだが。ここで数学で問われているのは、記憶力と要領のよさだけである。いま考えてみても、あんな難しい問題、自力でとけるわけがない。もとめられているのは、十五分で一問、解答を要領よく記述する力であつて、未知の問題に半日一日をかけて取り組み、独創的な方法で解こうとする努力ではなかつた。後者の方が、学問的、数学的にはるかに偉大であり、本当の実力であるのは明白であるのだが、自分の頭を使って数学の問題を解く喜びというのは、文化的意味を持った行為であり、そこにあるのはモーツァルトの美しいメロディーを聴いて感動するのと同様な、人類の価値ある共有財産を享受する喜びである。

それから何年かして、2浪して遅れて大学に入ってきたため交渉の途絶えていた竹下君と大学のキャンパスで行き会った。そこにはお互いに会えば肩をたたきあい、音楽や数学の美しさを語り合った、昔の親しい高校生時代の竹下君はいなかった。何か苦い塩をなめて大人になったような竹下君しかいなかった。もう数学や学問への憧れを語り合うこともなく、私たちは分かれた。

遙かなる戦火

内田幸彦

最近の世の乱れ、平和で豊かな全く自由な生活。戦争を知っている老人の一人として、良い意味でも、悪い意味においても、戦争中のことを書き残し、参考にしてもraitaiと思っ。

何かで読んだが、或る短大から「何か良い話を」と依頼された人が、当日、演壇に登ろうとすると、短大側から、

「申し上げて置きますが、今の短大生は太平洋戦争を知りませんので、そのお心算で……。」と注意され、戸惑ったという。結局、講師が何を話したかは書いていなかったが。

私は驚き、かつ発奮した。戦争については誰かが伝えなければいけない。

世界でたった一つの原因被爆国の日本。何百万もの親兄弟、身内が犠牲になったのである。太平洋戦争を知らないのが小学生というならまだしも、短大生も知らない

というのはおかしい。中学・高校でも少しは教わっている筈だ。

その理由は、何一つ不自由のない経済生活。また、何事も全く個人の自由という風潮。これらにある。あまりにも平和過ぎるのだ。

世に言う「平和呆け」である。「過ぎたるは及ばざるが如し」というように、平和も度を越せば世の中の秩序が乱れる。

銀行強盗、保険金殺人、幼児誘拐殺人、など昔（戦争前）はなかった犯罪が、毎日、目白押しに発生している。

戦争そのものについては歴史家達が正確に書き残している。学者ではない私は自分が経験してきた戦争中の庶民の生活を書き残して置きたい。

(一) 隣組

「読んだらお隣へお願いします」と回覧板が今も廻って来る。

この《隣組》は、実は戦争中の遺物で、創設されたのは一九四〇

年（昭和十五年）。太平洋戦争の前年だった。

一九三七年（昭和十二年）に始めた日中戦争（日支事変）は長期にわたって泥沼化して、生活物資も総て配給制となった。食料は勿論、衣料雑貨まで何一つ切符なしでは買えなくなった。

住民の協力が是非必要になり、配給制の他にも防空防火演習に、軍事教練に隣組は活躍した。以来、《隣組》の歴史は早一六十年になる。内務省が月一回、隣近所で一者に常会を開くことを義務づけたのが始まりである。

おまけに歌まで出来た。

一、 『隣組』（作詞・岡本一平）
とんとんとんからりと隣組

格子を開ければ顔なじみ
廻して頂戴回覧板

知らせられたり、知らせたり
（二）、三番略

四、 とんとんとんからりと隣組
何軒あらうと一所帯

心は一つの屋根の下

まとめられたり、まためたり

その任務は物資の配給が一番だったが、隣近所の結束を深めたのも事実で、現在もなお活躍しているのは周知の通りだ。

歌は、徳山環というソプラノ歌手がレコードに吹き込んでいる。

作詞した岡本一平は大正、昭和にかけて軽妙な漫画を朝日新聞に連載し、好評を博した画家である。美校時代に素封家の大貫家に乗り込み、かの子夫人をモノにした話是有名である。

かの子夫人は官能的な作品によって名を売った女流作家で、『老妓抄』『生々流転』『女体開顕』他、『岡本かの子全集』十五巻がある。長男、岡本太郎は大阪万博のテーマ像を制作した画家で御承知の人も多いと思う。父が画家、母が小説家、子供も画家——矢張り、血は争えぬ芸術一家なのだ。（毎日新聞社『一億人の昭和史』より）

中学生時代の音楽鑑賞

中井 豊

西洋のクラシック音楽（以下、簡単に「クラシック」と書く）に耳を傾けるようになったのは中学生になってからであった。

それ以前は、小学四年生の音楽の時間にロッシニの『ウィリアム・テル序曲』を鑑賞させられ、をさけて「これは『月光の曲』である」などと書いて提出した記憶くらいしかない。『月光の曲』という題名だけ、どこかで知っていたのだ。

学校で歌わされる曲は子供だましのようない気がし、退屈の余り、わざと音を外して歌った。そして、日頃は流行の歌謡曲の旋律を覚ようとする小学生だった。こちらは次々と発表される新曲に溢れていたから、覚えることも面白い。或いは、広い大人の世界の出来事に見えたのかも知れない。第一、こちらはオーケストラがバックだった。

「音楽」を聴こうとして最初に聴いたのはベートーヴェンの『運命』（交響曲第五番）だった。《名曲》というものの一つらしいという意識で聴いた。

中学校の友人――池田志都雄君の家には、《電莖》だったかステレオだったかあった。レコード盤も沢山あった。クラシックのSPレコードもあった。ようやくLPレコードやステレオ録音が話題になった時代の話だ。

ステレオという機器を身近で目にするようになったのは、一体いつ頃からだろうか。それまでは《電莖》がレコードを聴く機器だった。電気蓄音器を縮めて《電莖》と呼んだのである。

件の『運命』は一曲がレコード三、四枚に入っているということだった。これには恐れ入った。初めの部分を試しに聴いた。が、ちょっと聴いてみた位では楽しくも何ともなく、このような曲を通して聴くことは、とても無理だった。

それでも諦めず、『運命』の出だしは「運命が戸を叩く音である」とか何とか、あやしい知識を頭に、池田君と一緒に何度か聴いているうち、『運命』のテーマくらいは覚えてやうに思う。歌謡曲の旋律を覚えたことは役立つたのだろうか。

「音楽が判る」というのは、どういう事なのか確たる知識は今もないが、まあ何らかのメッセージを感じればいいのではないかと思う。人と話していても、内容を聞く場合、語り口を聞く場合、音声そのものを聞く場合と様々だから、言葉と同じような意味で理解しなくてもよい筈だ。

ともかく私なりに『運命』の第一楽章くらいは耳慣れた音楽になり、次第に幾らか判るような気が始めた。

我が家にもプレーヤーがあつて、それはラジオに接続して聴くようになった安物だった。音量が上がらないので、漏斗にビニール・ホ

ースを付けて耳に当てて聴いたりした。ちなみに、家にはダークダックスが歌うロシア民謡のドーナツ盤が一枚だけあつた。母親が買ってきたもので、『どもしび』『カチューシャ』などが入っていた。

家のプレーヤーで、『運命』の次に聴くべきシューベルトの『未完成』のソノシートを買ってかけてみた。初めに、この曲は《転調》が繰り返され云々」という解説があつた後、第一楽章が始まった。成程、感じが転々と変わる。これが《転調》ということだろう、などと独り決めしながら繰り返し聴いたが、この曲は残念ながら未だによくは判らない。

ソノシートというのは、もう売っていないだろう。薄いビニールの円盤にレコードと同じ溝を刻んだもので、レコードの代用品であり、値段の安いのが取り柄だった。ソノシートより一等上などのドーナツ盤で、中心部分が多ドーナツと同じように節約され、その部分は盤をターンテーブルへ載せて化粧品の蓋のような小さい円盤で中心を補ってから聴くようになっていた。

順序は定かでないが、『ウィリアム・テル序曲』のレコード、モーツァルトとベートーヴェンの『トルコ行進曲』やベルリオズの『ラコッツイ行進曲』の入ったレコード、リストの『ハンガリア狂詩曲』のレコード、同じくリストの『ラ・カンパネラ』の入ったピアノ曲のレコードと聴いて行った。いずれもドーナツ盤だった。

中学校には音楽室のグラランド・ピアノの他に、階段下の空き部屋にアップライトのピアノがあった。妹の『バイエル』を放課後に一人で弾いてみたりもした。聴くだけでは物足りなくなつたらしい。

或る夜、トランジスター・ラジオでクラシックの番組を聴いていると、いきなり印象的な曲が流れて来た。メンデルスゾーンの『ヴァイオリン協奏曲』だった。このロマンティックな曲は中学生時代、一番のお気に入りとなり、判らぬままに小さなスコアまで買った。この曲は中学三年生のための鑑賞曲になっていることを後で習った。してみると、まことに標準的な「耳」だった訳だ。

中学を卒業する頃にはステレオが普及し始めた。三年生になって転校した先の学校にもあった。早速、音楽の先生に頼んで日曜日にメンデルスゾーンの『ヴァイオリン協奏曲』を聴かせて貰った。どこかで耳にしたシューベルトの『交響曲第七番』も好きになった。

現在では、『運命』全曲も一枚の小さなMDに収録できるようになった。そのせいか、中学生にはとてつもなく長く見えた『運命』も、短い部類の交響曲に思えてくる。たまにしか音楽をかけない癖に、広くて音響の良い部屋に坐つて、大音量で聴かないから短く聞こえるのかも知れないと思ったりする。トランジスター・ラジオで聴いた時のような感動は魅らない。皮肉なものである。